

20日目 11月5日(十月九日)

測地・富岡町(苓北町)  
泊地・富岡町(苓北町)

《測》 朝より晴天。

【本隊】伊能、下河辺、永井、上田、長蔵。

5時頃高浜村出發。都呂々村にて昼食。  
12時頃富岡町へ着く。

【支隊】

6時頃出發。

堀印から袋印までと富岡岬を回る(5・4km)。

12時帰宿。

面会・荒木三左衛門(町庄屋) (苗字帯刀御免)。

町年高島伝左衛門。村川彦八郎。

着後、島原御預所富岡町詰代官渡辺敬助。藤本恕助と同役。その後・同前吟味役矢川十太夫。富岡役所重役)。

この夜曇天。雲間に測量する。

宿・前日同。

《巡》

晴天であつたが、北風が強く乗船できず。伊能様駕籠にて陸路を富岡へ行く。

代官様も同じ。

大庄屋は駕籠、庄屋鞍馬にて。

人足不足のため、高浜村よりおよそ500人・馬7疋を出す。一、昼食の弁当を都呂々村役座まで運ぶ。

一、坂部様隊は、朔日富岡に就いており、今日まで城山まわりの測量を終了。

全員、富岡町に泊まる。

伊能様宿 富岡二丁目 庄屋宅。

坂部様宿 同所一丁目 米屋宅。

代官様宿 同所 〃 新宅。

付添大庄屋庄屋 同所 砥岐屋。

郡仕送り荷物 同所三丁目 唐物屋。

竿取衆 同所 本家。

郡中竿取 同所 平兵衛宅。

一、昨日4日、旗合わせの連絡のため、島原口之津ま

で竿取の内小六を遣わす。

一、天文測量あり、20時頃までに済む。

高浜村より人足500人も出すとは、村人（若い男衆）  
総動員と言つて過言ではない。

### 《木山家文書》

覚 写

一 測量方御役人様今十日二江村御泊同十一日御順道御二  
手ニ御別被遊御順道左之通

一 伊能様二江村御出立十一日朝正七ツ鬼池村

同日御泊り 御領村

十二日 佐伊津村

御泊り 町山口村

一 坂部様二江村御出立

十一日正七ツ 下内野村

井手村

上野原村

新休村

同日御泊 下河内村

十二日御出立右同断 本泉村

廣瀬村

本戸馬場村

同日御泊り 町山口村

右之通御測量御順道被仰渡候間為御知申進候

尤御昼喰場所之儀者未夕相決不申追々為御知可申進候

万端無間違様御取計可被成候先々御順道御休泊之儀者町山

口村へ合宿被遊候上相決可申間此段御承知可被成候以上

十月九日 御測量方附添

大庄屋 庄屋中

御通行筋村々

大庄屋 庄屋 衆中

此触廣瀬村より本戸方へ御継可被成候

### 富岡町

《測》と《巡》を見比べると興味深い。それは、《測》  
が測量に直接測量に関するものを記しているのに対して、  
《宜》は裏方としての事項を記しているからである。例え  
ば、高浜から富岡へ向かうのに、測量はしないので、海路  
が速いが、天気の良い陸路を歩くことになったこと。そ  
のためか、人足が不足したので、村から500人もの人を  
出した事。また、伊能、代官、大庄屋は駕籠なのに、庄屋

は鞍馬と差がついていること。ここには記していないが、伊能を除く測量隊員は、歩行だと思われる。

富岡は、五人衆の一、志岐氏の志岐城の隣村で一寒漁村に過ぎなかったが、天草の支配者となった寺澤広高は、この地に新城を築き富岡と称した。それまでは、留岡ともいわれているし、耶蘇教年報にはフクロとなっている。また袋の浦ともいわれていたらしい。

とにかく、寺澤広高がこの地に城を築いたことから、幕末まで、天草の政治の中心地として栄えた。

富岡城は、寺澤広高によって築かれ、天草島原の乱で戦場となり荒れ果てたが、その後新天草領主山崎家治によって修築された。山崎家治が転封となり天領となってからは、役所は三の丸に置かれた。現在の九大臨界実験所宿舎の所である。また代官鈴木重成の役宅は、城内ではなく、城下（百間堀の南側）に置かれた。代官は民政官であったため、城には城番として肥後藩から派遣された。

その後、再び私領となり、戸田忠昌が入城するが、忠昌が転封に際し、城が民の暮らしを圧迫するという事、平和な世となり城を必要としなくなったことなどから、富岡城は破城とされた歴史を持つ。したがって、伊能忠敬来島時

は、城としては存在していなかった。現在は、荅北町により、復元が成されている。

富岡城の歴史については、城内の案内板に簡潔に書かれているので紹介する。

### 富岡城について

富岡城は慶長六年（1601）に天草の領主となった肥前唐津藩の寺澤広高によって築かれました。その後、山崎家治の私領時代、鈴木重成・重辰代官の天領時代を経て、戸田忠昌の私領時代に城が壊されました。それ以後は、明治まで天領として三の丸跡に代官所がおかれました。

富岡城には、城歴の中で、特筆すべきことがあります。寛永十四年（1637）に起こった『天草・島原の乱』に巻き込まれ、幕府側拠点として、一揆勢の攻撃目標になったのです。唐津藩の必死の守りで落城は免れましたが、このことが結果として、乱の早期終結に繋がりました。その後の徳川政権の安定に大きく寄与する事になりました。乱の鎮圧後に、築城の名手と謳われた山崎氏が、天草に送りこまれ、城の大規模修理と縄張り拡大を行い、富岡半島を島に見立て要塞を築きま

した。それは幕府が対面保持と、外洋に面する富岡城を、水面下で「国際戦上の守りの要」として位置付けていたことに外なりません。この時期、幕府は、鎖国政策を進めていましたが、海外列強の侵略を恐れていました。

時代が下った寛文十年（1670）の「戸田氏の破城は、徳川政権が完全に安定した証しとして、さらには、平和の象徴としての施策であったと推察されます。この時期になると、外交面での危機も回避され、海外にも目を向けた「戦鬪城としての富岡城」の必要性が失われたと思われる。戸田氏の破城の裏には、幕府からの示唆があったものと思われ。事実、『富岡城破城の噂話（戸田文書）』には、「如何なる幕府政策の変化に因りてか天草に在る僅かに七年。折角再築せし城郭を毀ちて関東に復帰する」との記述があります。

平成十一年八月

熊本県天草郡苓北町教育委員会

富岡は天草の首都であるため、他村とは異なる町がつくられてきた。支配者関係の役人は少なかったが、それを補助する地役人（遠見番・山方役）の役宅。各組の宿（江戸という藩屋敷？）、寺院が作られた。そして当然の如く多

くの商家が軒を連ねた。

それでは、富岡の人口はいかほどだったのだろうか。蔓延三年（1750）、忠敬測量の60年前でちよつと古い記録だが。

|       |       |          |        |
|-------|-------|----------|--------|
| 人数    | 1913人 | 男965人    | 女948人  |
| 家数    | 373軒  | 内町家269軒  | 漁家104軒 |
| 僧数    | 55人   | 内僧32人    | 尼2人    |
| 山伏    | 4人    |          |        |
| 切支丹類族 | 310人  |          |        |
| 酒屋    | 16軒   | 醸造高160石程 |        |
| 町役人   | 4名    |          |        |

となつている。

以外に人口は少ない。

さらに、天保二年（1831）になると、やや人口は増えて、家数503軒、人口2718人。幕末の蔓延元年（1860）には、家数565軒、人口3077人となっている。しかし、天草の他村比べてみると、天保二年のデータによると、二江村（3346人）、御領村（5139人）、佐伊津村（3620人）、町山口村（2886人）、小宮地村（3187人）、下浦村（2776人）、大矢野上村（5670人）、同中村（3153人）、同登立村（3596人）、御所浦村（3766人）、久玉村（35

12人)、牛深村(6669人)、大江村(3290人)、高浜村(3629人)と、富岡町より人口が多い村が多数あることが分かる。ただし、農業中心の社会のため、人口が多いから豊かな地区とは限らず、貧富的というと、商業都市ともいえる富岡は、ダントツの位置を占めていたことには違いない。

富岡は、行政、商業の中心地として、あるいは志岐氏の居城、天草の乱関係など、中世から江戸時代を通じて天草の歴史の中心的位置を占めていたので、遺跡・名所は多い。ただ、伊能忠敬には、そのような天草歴史を尋ねる目的ではないため、ただ単なる測量の通過点に過ぎなかった。

## 21日目 11月6日(十月十日)

測地・二江村、鬼池村(天草市五和町)

富岡町、志岐村、上津深江村、

坂瀬川村(苓北町)

泊地・二江村(天草市五和町)

《測》 朝曇り晴れ

両隊とも富岡町を6時頃出発。

【坂部隊】(先手)坂部、上田、永井、長蔵。

二江村千崎より始める。逆に通詞崎まで測る。

また、順に海辺と山越え横切り街道(○)印まで測る

(逆順合計沿海 2・1km)。

通詞島一周測(3・5km)。また、千崎より始め、

(○)印を残し、下内野村制札迄横切り、仕越測(2・

6km、合計8・2km)。

【伊能隊】(後手)伊能、下河辺、青木、箱田、平助。

富岡町(橋)印より始める。三丁目、四丁目、五丁目、

出来町、裏海辺、志岐村、<sup>\*</sup>三會川、紺屋町、浜ノ町、

上津深江村、坂瀬川和田ノ前、二江村通詞にて坂

部隊と合流(10・4km)。また、二江村(○)印より

始め、二江川(幅54m)、洲ノ脇、鬼池村カ口崎

迄仕越測(2・5km)。

両隊共、14時二江村へ着く。

本陣・二江村庄屋長島増太郎。

坂部宿・百姓順之丞。

下河辺、青木、永井宿・百姓正左衛門。

この夜曇りで不測。

※志岐村を志伎村と誤記

《巡》晴天。北東の風

未明、富岡出發。

志岐村海辺通り、上津深江坂瀬川、二江村まで測量済。  
坂部隊、通詞島まわり測量済。

二江村泊まり。

伊能様宿・二江村庄屋宅。

坂部様宿・嘉右衛門新宅。（《測》では順之丞）

三人様宿・庄右衛門宅。（《測》では正左衛門）

代官様宿・宅右衛門宅。

付廻り大庄屋庄屋宿・代吉宅。

郡方荷物・幸平次宅。

竿取・作平次宅。

井手組庄屋一同・米作宅。

久玉、大矢野大庄屋及び都呂々庄屋、夕方吉祥丸で遅れて到着。

《宜》

測量方役人、5時頃出發し富岡へ向かう。同所まで人足当村だけで出す。昼飯を当村より都呂々まで弁当を

出す。

宜珍、お付き添いで富岡へ行く。

22日目 11月7日（十月十一日）

測地・鬼池村・御領村・下内野村・井手村

上野原村・城木場村（天草市五和町）

新休村・下河内村（天草市本町）

泊地・（伊能隊）御領村（天草市五和町）

（坂部隊）下河内村（天草市本町）

《測》朝大曇り。

手分けして測量。両手共7時前後二江村出發。

【伊能隊】伊能、下河辺、永井、上田、平助。

鬼池村カ口埼（又の名を新五郎浜）より始める。

引坂、宮津、田ノ尻、それより鬼池本村、御領村

古里、大島にて中飯（百姓小山清四郎、家作大に

よし。苗字免許なり。新蕎麦を出す。同所百姓勝

之丞と云う者あり。当時、天草第一の富家なりと

云う）、浜田、御領本村まで測る（8・5km）。

外に串迄仕越（272m）、海辺より宿まで測る

(152 m)、御領村大島一周測(1.4 km、渡り幅413 m)、合計10.7 km。

14時頃着く。

宿・御領村大庄屋長岡五郎左衛門(上下残らず一軒にて済む)。

※勝之丞<sup>II</sup> 石本家五代・石本勝之丞。隠居名・平兵衛

【坂部隊】坂部、青木、箱田、長蔵。

下内野村より始める。懸橋、小峯、井手村、塔ヶ崎、平、上野原村笹原、城木場村、打越、新休村(この村に曹洞宗松栄山東向寺、御証文五十石。この村から7.3 km先に本村という村有り)、下河内下尾、懸水まで測る(9.6 km)。

宿・下河内村庄屋鶴田新五右衛門。

坂部隊の宿は、下河内村庄屋鶴田新五右衛門となっているが、下河内村の庄屋は佐藤弥右衛門であり、測量日記の間違い。鶴田新五右衛門は、本村の庄屋である。

《巡》晴天

伊能隊・鬼池村の内、引坂残り梵天より始め。大嶋小山清四郎方にて昼食。14時頃盃出る。蕎麦切出る。付廻り衆中まで。

御領村着く。役座下まで測量済。

坂部隊は、下内野村、二江村境より始め、城木場にて昼食の予定。下河内村に泊まりの予定。

伊能様宿・役座。

下河内、永井様宿・同。

代官様宿・寺隠宅。

付添衆一同宿・東禅寺。

郡方荷物・次三郎。

23日 11月8日(十月十二日)

測地・佐伊津村・広瀬村・本戸馬場村・

下河内村・町山口村(天草市)

泊地・町山口村(天草市本渡)

《測》朝曇天。

7時御領村出発。

【伊能隊】伊能、下河辺、永井、上田、平助。

御領村串より始め、佐伊津村明瀬、広瀬村茂木根、本戸馬場村津金淵、広瀬川（幅190m）、津印迄測る街道を横切り、手分けと合流（8・8km）。

本戸馬場村小松原、町山口村、亀川村日渡し、瀬戸迄測る（3・6km）。  
外に瀬戸下島より同上島へ渡る（278m）。

【坂部隊】坂部、青木、箱田、長蔵。

下河内村懸水始め（川の向かいに本泉村あり）、本戸馬場市ノ瀬、山仁田、法泉寺、梶山、中村、今釜、津金淵。

横切りの隊（坂部）は13時頃、沿海測量隊は13時30分に町山口村に着く。

本陣・庄屋大谷小十郎。

別宿・隠宅（庄屋家作大にしてよし）。  
この夜大曇り、雲間八九星測量。

御領村役座下海辺より測量を始める。広瀬村向かい本戸馬場村の内今釜まで測量済。

坂部隊は、下河内村より始め広瀬村向かいまで済み。

両手共町山口村へ泊まり。

晩曇りのため早々に天体観測中止。

伊能様宿・役宅。

下河辺、永井様宿・同。

坂部隊、青木様宿・役座新宅。

代官様宿・五郎兵衛。

付添衆宿・大和屋。

下浦村庄屋町山口へ出向き。

久玉村大庄屋病気に付き町山口村から引き取る。

栖本組大庄屋、小島子村庄屋親子、大島子村庄屋町山口へ出向き伺い。

### 《宜》

測量方泊まりの町山口まで飛脚を出す。

### 《巡》 晴天

6時出発。

当時、本渡は町山口村と本戸馬場村（外に広瀬村）に分かれており、本戸馬場村に本戸組大庄屋（木山家）が置かれていた。町山口村大谷庄屋役宅は、現在の諏訪神社の地

にあった。標柱が建っている。

日誌によると、広瀬川の川幅が189m、瀬戸海峡の幅が227mとなっていて、川幅や海峡の幅が、現在とはずいぶん違う。ちなみに、2万5千分の国土地理院地図で計ってみると、広瀬川大矢橋で80m。瀬戸海峡は157mである。兩岸の埋め立てが進んでいることが分かる。

## 祇園橋と大谷庄屋

大谷元庄屋家（現諏訪神社）の近くを流れる町山口川に、石橋が架けられている。石橋と言えば、眼鏡橋が一般的だが、この石橋は桁梁橋と言って、木造の橋の作りと同じような形式である。

この石橋は、もともと名前が無く、単に石橋と呼ばれていたようだが、この橋の袂に祇園社があることから、いつしか祇園橋と呼ばれるようになった。

この石橋が架けられたのは、天保三年（1832）のことである。つまり伊能忠敬の天草測量から22年後のことだ。伊能測量隊は、小松原から町山口村を経由して、亀川村まで測量をしている。当然町山口川に架けられていた橋を渡っていることになる。ただこの祇園橋架設地点の下流に架け

られていた土橋（木造に土をかぶせた橋）を渡ったことだろう。

この祇園橋の建設に当たったの発起人となったのが、町山口村庄屋大谷健之助である。この健之助の先代が、伊能測量時の庄屋大谷小十郎である。

もし、忠敬測量時にこの橋が存在していたなら、忠敬はどんな感想を持っただろうか。ひよっとしたら、測量日記に一文残していたかもしれない。

祇園橋は、昭和五十年（1975）に国の重要文化財に指定された。熊本は全国的に見ても石橋の多いところだが、国重文に指定されている石橋は、祇園橋の他に、山都町矢部の通潤橋と美里町砥用の霊台橋の三つしかない。言い換えれば、それだけ文化財として価値のある橋という事になる。

国指定登録文化財等データベースの登録に当たったの解説文には次のように記されている。

天草下島の本渡市市街地中央を西から東に流れる川に架けられた長さ約28・6m、幅約3・3mの長大な石造桁橋で、石材には下浦石と呼ばれる地元産の砂岩質の切石を用いている。橋の北岸側に残る記念碑によって、天保三年（1832）に地元の石屋によって建設されたことがわかる。江戸時代以前の石造桁橋と

しては現存最大のもので、石造アーチ式が多い九州では、特殊なものであり、技術的にも注目すべき点が多い。

本渡市は指定当時の市名で現在は天草市。また石屋は下浦村石屋（石工）辰右衛門という人で、架橋記念碑に名前が残されている。

現在は橋のような公共建造物は、行政当局によって建造されるのが普通だが、当時は民間の手によってなされたという事にも注目したい。この祇園橋も、幕府による建造ではなく、民間の手によって建造されている。発起人の大谷健之助の他に、世話人として久屋與一平、若松屋次平、叶屋伊平の三人、そしてたくさんの寄付者の名前が架橋記念日に刻まれている、当然工事に携わったのも地元民であっただろう。

天草にある楠浦の石橋（天草市楠浦町）も、明治になってからの架橋であるが、（庄屋・戸長）宗像堅固の手によって架けられている。それは、伊能忠敬が、当初自前で測量を開始したと共通している。

架橋から既に180年余、柱があることから水害時、特に上流からの流木等が柱に引っかかり、大変な水圧を受けることが過去何度もあったが、固い岩盤に支えられ、かつ技術的に優れているところから、それらに耐え今日まで、

現役橋として残っている。天草市にとって、いや全国的にも貴重な文化財である。



祇園橋 天草市舟ノ尾町・中央新町

24日 11月9日(十月十三日)

測地・志柿村・楠浦村・下浦村・

亀川村(天草市)

泊地・楠浦村(天草市楠浦町)

《測》朝晴天。

先後手とも六時頃町山口村出發。

【坂部隊】(先手)坂部、青木、箱田、平助。

瀬戸上島(即東天草)志柿村瀬戸(瀬印)より始める。

左山に添え、下浦村小手、舟津にて留め置き(4・5 km)。

また楠浦村(瀬戸下島西天草)、中越より舟津まで測り、後手と合流(1・4 km)。

外に楠浦二色島一周測(1・1 km)。合計7・0 km)。

【伊能隊】(後手)伊能、下河辺、永井、上田、長蔵。

亀川村瀬戸より始める。日渡、楠浦村藤瀬新田、中村、鎌、舟津まで測る(5・6 km)。

外に楠浦村亀島一周測(1・3 km)。宿まで1・2 km、合計8・1 km。

両手共13時前楠浦村へ到着。

本陣・庄屋宗像三郎兵衛。

坂部宿・清助。

下・青・永宿・藤六。

此の夜(以下記載なし)

二色島とは、現在の錦島のこと、当時は島であったことや、亀島とは名前が記して無いが、現在の大門当たりに島があったことが、伊能図から分かる。また、現在の瀬戸海峡と比べると、海峡の幅がずいぶん広い。

《巡》晴天。

5時頃出發。

亀川村より開始、楠浦村庄屋元まで測量。

坂部隊は大宮地村境まで測量。

志柿村庄屋楠浦村へ出向き伺い。

伊能様宿・役座。

坂部様宿・清助。

三人様宿・藤六。

代官様宿・宇内。

付添衆宿・富左衛門。

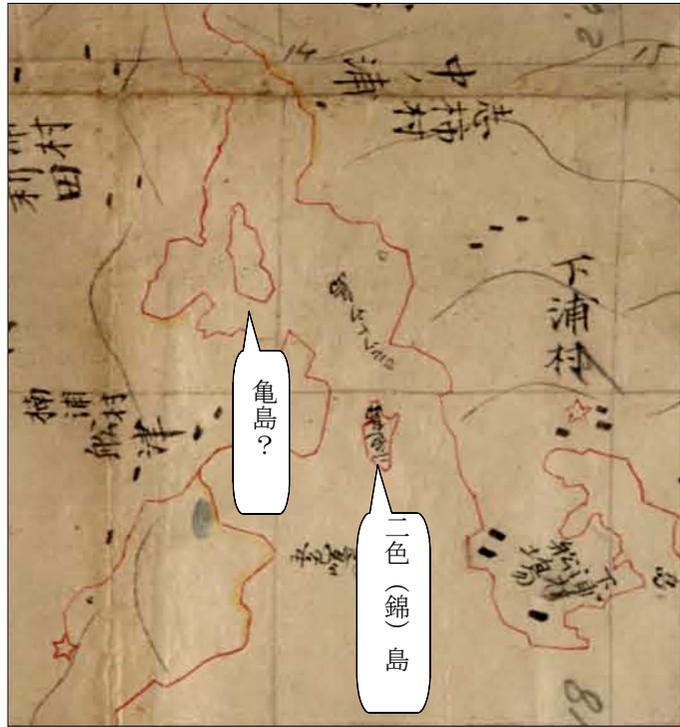
《木山家文書》

覚

一 馬 耄匹

荷持耄人

渡部敬助上下



一 荷持耄人 手代耄人

右者測量方御用ニ付明十四日方楠浦村江致出役候 村継人  
馬無滞出可申候以上

十月十三日 富岡御役所

富岡町方新休村通楠浦村迄

右村々 大庄屋

庄屋

此状十四日辰ノ下刻到来即刻町山口へ

25日 11月10日 (十月十四日)

測地・大多尾村・大宮地村・

小宮地村 (天草市新和町)

楠浦村 (天草市楠浦町)

泊地・楠浦村 (天草市楠浦町)

《測》朝曇り晴れ

【坂部隊】(先手) 坂部、下河辺、永井、平助。

6時前に出発。

大多尾測所より始める。左山に逆測。浦ノ迫にて後手  
と合流(沿海7・0km)。横島一周測(4・8km)。合

計11・8 km)。

【伊能隊】(後手)伊能、青木、上田、箱田、長蔵。

6時頃出発。

楠浦村中越より始め、立ノ浦、観音、大宮地村、小宮地村<sup>※</sup>諏方崎、大多尾村浦ノ迫にて先手と合流(13・6 km)。外に入江渡121 m、合計13・7 km。

両手共16時宿着。前夜同泊。

午後より曇天。夜も同じ。

《巡》晴天。

4時〜5時に出発。

坂部隊は大多尾村の横島より測量。小宮地村新田まで。伊能隊は楠浦新田から大宮地大多尾村界の深浦での合流まで測量済。

付廻り代官藤本怒助様、御役所御用に付き引き取り。代わりに渡辺敬助様出勤。

※諏方崎は諏訪崎か。《巡》に記されているように、当時も干拓が行われていたようだが、現在のように広大な新田ではなかった、伊能図によると、当時はまだ湾が深く入

り込んでいたことが分かる。

## 新田開発

このように、〇〇新田と言うように、新田がよく登場する。つまり、この頃になると、耕地の乏しかった天草でも、各地で新田が開発されていたことがよく分かる。その新田はほとんどが、海の埋め立てによるものだ。現在、天草各地に広々と広がる海岸沿いの水田の多くは、この江戸時代に干拓されたものと言えよう。

この新田開発の様子は、各所の埋立図、工事方法が上田宜珍の『天草島鏡』に、詳しく載っている。

また、この海埋立の技術は、幕末、天草人の北野織部(赤崎村庄屋)の長崎外人居留地埋立に、その本領を發揮することになる。(詳しくは北野典夫著・『天草海外発展史・上巻』葦書房刊)

小宮地新田については、現地に干拓碑と碑文がある。

それによると、第一期とも言える干拓は、延宝元年(1673)から4年の歳月をかけて、菊池地方の豪族、合志氏の子孫の合志弥兵衛が行った。天草では一番古い干拓地で、また最大規模の干拓地である。295間(約500 m)もの松原土手の内側に、約70町歩(70 ha)の水田が造

られた。その結果、小宮地村は、水田面積130町歩を有する天草有数の米どころとなった。つまり、干拓によって水田面積が倍になったわけである。その結果村高は、志岐村(1025石)、御領村(904石)に次いで小宮地村883石とは三番目に位置している。(文政十年の定免石高・天草島鏡)

以外に早い時期に干拓が行われたことが分かる。ちなみに延宝年間、戸田忠昌が富岡城を破城して、第二次天領となった頃である。さらに、第二期とも言える荒新開干拓は、明治になって行われた。

## 附廻り代官交代

当時幕府領(天領)であった天草は、島原藩預かりであった。富岡役所にはその島原藩の代官として、藤本恕助と渡辺敬助の2名がいたようである。その代官のうち藤本氏が最初に付き廻り役として、測量隊に同行したが、大多尾村から出発し、再び大多尾村へ帰ってきて、天草下島の測量を終えたところで、渡辺氏と交代した模様。

ただし、この交代は、忠敬の測量日記には記載無く、宜珍の巡廻日記に「附廻り御代官藤本恕助様、御役所御用ニ付御引取 代りニ渡辺敬助様御出勤ニ相成ル」とあり、こ

こで交代したことが分かる。

もちろん御用とは方便で、最初から下島と上島を分担していたようにも思える。

この附廻り役の代官交代を、几帳面な忠敬が記していないのが、やや腑に落ちない。単なる記載漏れか、あるいは、附廻り役としての代官を軽視していたのか、どうしてもよかつたのか、それは分からない。ただ、他所の測量においても、附廻り役に関しての記述はあまり見られないようだ。

尚、渡辺代官はこの年七月二十二日(8月21日)に今井佐四郎と替わったばかりである。

文化七年(1810)七・二十二

陣屋詰役交代、改役人荒木武太夫、代官今井佐四郎島原に引取り、替りに矢川十太夫、渡辺敬助来任す。

(近代年譜)

これは、現代でいう定期異動だと思うが、この事例をみてもわかるように、忠敬日記に付き廻り代官交代を記していないことを補完するうえでも、宜珍の巡廻日記は史料価値が大きい。

この日、天草下島の測量を終えた一行は、休む間もなく、上島の測量へと向かう。